タニマチを生み出す環境づくり

帯野氏

帯野　文化施設の閉館が相次いでいます。前半は演者や施設側の立場から現状を検証し、議論を行っていきたいと思います。

南陵　東京と大阪は経済規模で言えば10対1ほどですが、寄席芸人を比較すると、講談師50人対20人、落語家500人対250人と善戦しています。他の芸能を加えれば、大阪の芸能文化は、さらに大きなものになります。しかもそれらは皆、民の力、タニマチが支えてきたのです。長い伝統に培われてきた文化は早々と消滅はしないと思いますが、将来を考えると、非常に憂慮することがあります。というのは大阪市内の中心部に人が住んでおらず、活気がないことです。これは鉄道会社が郊外型のまちづくりを行った結果だと思います。文化を支えてきた人々が郊外へ流出したことに文化衰退の一因があると私は思っています。船場生まれの私の母によれば、昔、店の主人が文楽に行く際に丁稚をお伴につけてやり、自然と商人言葉や習わしを身に付けさせたそうです。これが文化の底力ではないでしょうか。

南陵氏

広瀬　定年後、よく趣味を持っているとよいと言われますが、「65歳になったから文楽へ」と思っても、すぐに親しめるわけではありません。劇場へは、子どもの頃から行きつけていないと、足を運びにくいものです。現状では観客は年配ばかりですが、子どもへの普及に取り組まなければ、将来の観客も育ちません。たとえ受験や就職で一旦鑑賞をやめても、子どもの頃に触れていれば、再び戻って来ると思います。演者養成も大切ですが、芸能は観客がいないと成立しません。観客を育てる土壌を関西の芸能関係者全体で取り組むべきだと思います。

広瀬氏

芸術は量より質が問題

伊東　年末にワッハ上方の通天閣移転案が見送られ、現地存続案に方針転換されました。逆転できたのは世論のおかげです。ワッハ上方は民放6社によるNPOが指定管理者になっており、吉本もビル所有者として携わっています。難波のあの場所には設立約20年で培った民間の連携、上方演芸の歴史そのものが蓄積されています。ただし、橋下知事は存続条件として「11年度の入場者を8倍の40万人にせよ」という難題を提示しています。ワッハ上方はホールだけではなく、資料館でもあるのですから、集客数ではなく機能や役割で評価してほしいと思います。もちろん我々も集客に尽力しますので、一般の方も支援の一つとして誘い合って来てくださるとうれしいです。

南陵　文化は集客数ではなく質で評価すべきですね。最近、アメリカの大学が貴重な明治期の講談本を買い集めていることをご存じでしょうか。肝心の大阪がその価値に気づかないとは残念で仕方ありません。タニマチがいなければ、企業や行政が支援すべきなのに、近鉄がOSK歌劇団を手放した時も支援した企業は皆無でした。民間の力だけで成立が難しいなら、しかるべき支援を行政が考えてほしいと思います。

伊東　大阪センチュリー交響楽団が解散の危機に直面した時には、会員数が伸びたのにもかかわらず、最近、再び苦戦しているそうです。市民の無関心さが歯がゆいばかりです。

帯野　大阪人にはタニマチ精神があると思っていたのですが現状は厳しいですね。

伊東　橋下知事は「繁昌亭が出来たからワッハ上方は不要ではないか」と発言しておられましたが、繁昌亭は落語専門、ワッハ上方は上方芸能全体が対象なので役割が違います。今後、ワッハ上方は資料館としての役割をアピールしていくつもりです。ワッハ上方には、民放から無償貸与された3000本もの音声・映像資料が所蔵されています。著作権のうるさいこの時代に、無料でこれだけ充実したライブラリーが利用できるのは、全国でワッハ上方だけだと自負しています。

伊東氏

南陵　ある大学教授がワッハ上方を批判して「東京の寄席小屋は補助金なしで運営しているのに」と述べておられましたが、実は新宿末広亭にも落語芸術協会を通して文化庁の補助金が一部、入っているんです。インテリがそれを知らないのは辛い。

広瀬　大阪の民間の力は誇るべきことですが、行政の「民間がやるから、まかせておけばいい」という態度はいただけません。いまだに、府民ホールがないのもその現れです。

関西フィルのアートマネージメント

帯野　マネージメントする立場から文化支援についてお聞きしたいと思います。

西濱　大阪にはプロオーケストラが4つあり、年間動員数は45万人。これはあるアイドル歌手の大阪ドーム公演1週間分と同じです。量では到底かないません。1都市で4楽団あるのは東京以外では大阪だけなので、一つにしようという議論もありました。しかし1都市1楽団は衰退の構図で、ライバルがなくなると成長しません。この4楽団についての市民の認識は低く、楽団の活動も個々に細々となされて

西濱氏